

平成29年度 第6回小平市産業振興基本計画検討委員会 会議要録

1 開催日時及び場所

日時：平成29年8月16日（水）午前10時から11時30分まで

場所：小平市役所 6階 大会議室

2 出席者

(1) 委員

8名（小出委員、古田委員欠席）

(2) オブザーバー

多摩信用金庫 長島地域連携支援部長

(3) 事務局

市：産業振興課板谷課長、同増原課長補佐、同石田係長、同鎌田係長

多摩信用金庫：地域連携支援部 嵯峨調査役、鈴木

首都大学東京：都市環境学部 太田特任助教、URA室 柴田

(4) 傍聴者

0名

3 配布資料

資料① 産業振興基本計画骨子案

資料② 産業振興基本計画重点施策案

資料③ 今後のスケジュール

参考 小平市産業振興基本計画及び小平市農業振興計画の策定に向けた基礎調査報告書

4 内容(議事要旨)

(1) 報告 小平市産業振興基本計画及び小平市農業振興計画の策定に向けた基礎調査報告書の修正について

『小平市産業振興基本計画及び小平市農業振興計画の策定に向けた基礎調査報告書』について、修正があったため報告書を再配付することについて、事務局から説明した。

(2) 議題

産業振興基本計画骨子案について

事務局から資料②を用いて、産業振興基本計画骨子案について説明をした。

(委員長) 今の説明について、質問や意見はあるか。

(委員) 7章の重点施策に活動支援、環境整備とあるが、本来はその前にそれぞれの産業の活性化、振興のための方策があって然るべきである。5章の目標に沿って、どのような振興方策があるのか、考え方、それに沿ってどのような支援ができるのか、という流れではないかと思う。

(委員長) 具体的には7章の1、2の前に、産業分野別の産業振興の基本的な方針がくるとい

うことか。

(委員) もう分野別の産業振興というのは古いのではないかと思った。それぞれ分野別に振興施策や、支援策が出てくるような時代ではないのではないかと思っていた。

(委員長) そのような方針で7章が組まれていると思うが、具体的にどういう形に変えていったほうがよいのか。

(委員) 考えていくうちに、市民に対しての分かりやすさを考えると、従来通り、農業、工業、商業、観光と縦系列でそれぞれの振興方策を考え、それに従って事業主体の個別に対する、あるいは事業環境に対する支援とした方が理解しやすい。

7章に就労支援・人材マッチングということがあるが、どこで就労を活性化させるのか、マッチングをすることはどういう意味なのか、振興策として語られないと意味がないのではないか。創業支援についても、なぜ創業支援が必要なのかというようなことが語れないと意味がないのではないか。

(委員長) それぞれの項目で、そういった事を少し丹念に説明していくということではないか。

(委員) 基本方針の目標課題の分け方を整理してはどうか。方針目的課題というものは、前提として方針と目的があり、調査結果と世の中の流れから課題が抽出され、その課題解決のための重点施策、それをブレイクダウンした第8章というイメージである。そういう意味では流れは良いが、基本方針自体に違和感がある。

(委員長) そうすると、基本的には、基本方針からなじまないということか。

(委員) 流れに違和感がある。

(委員長) 計画策定の作業を進めていかなければならないので、もう少し具体的にどこをどういう風に変えると良いか。

(委員) 基本方針で食と職をかけているところがそもそもいかなものか。職を求めることに応えるということが、今の小平市の課題であるのか疑問である。この職に食べる食、農業や農地が大事ということは承知しているが、それを掛け合わせるという事に違和感がある。小平市はプチ田舎と言っているが、これはプチ田舎ではなく、田舎の基本方針ではないか。都心に1番近いプチ田舎ということがこの方針からは感じ取れない。

(委員長) 目指すべき将来像について、少し変えてもらえれば後は違和感がなくなるということか。

(委員) それに従って議論があって納得がいけば、目標目的と課題がすっきり整理されると思う。後は時代の背景や流れをどう解釈して課題にするかを議論していないと思う。

(委員長) この事について、何か意見はあるか。

(委員) 第7章は1. 産業振興のための活動支援と2. 産業振興のための環境整備が逆転しているように感じる。2がそれぞれの農業や工業や商業の活性化、振興方策となり、これに対して行政がどう支援していくのかということが、1に挙げられている就労支援や、商業支援といった個別の事業主体に対する個別の支援であったり、事業環境をサポートする支援だったりということになると思う。

ここに、商店街の活性化とあるが、どのように商店街を活性化するのか。1番大事な課題は最寄品の購買率を上げるということであると考え。このために市は事業主体に対してどういうサポートをするのかということが私の考える流れである。

(委員長) この骨子の流れの仕組みは、7章の重点施策の例えば商店街の活性化が、8章の産業振興プログラムという、具体的な内容になってくると思う。

(委員) この計画の最終的な結論は、市がどのように産業振興に対して支援ができるのか、ということではないか。そうであれば、産業がどうすれば活性化するのか分からないと、支援のしようがないという事ではないか。だから、7章は1と2が逆転していると感じた訳である。少なくともこの逆転を直せば、何となく通りが良くなるかなと感じる。その時に産業分野別が良いのか産業分野間でクロスオーバーさせるのが良いのか。クロスオーバーさせる事は難しいと思う。

骨子案の裏面の体系図をすっきり描けるかどうかだと思うが、掛け合わせると流れがおかしい。接点の仕方を少し工夫しないとこの絵が描けないと思う。

(委員長) 市としてはどうか。

(事務局) これまで議論した中で進めているので、順番の入れ替えなど委員の意見を踏まえて修正は考えていくが、大幅に変えるとなると議論が振り出しに戻ってしまう。

(委員) 中身全体は変わらなくても、書き方は変えられると思う。どちらかという、書き方の所を指摘している訳だから、振り出しに戻るとは思わない。

(委員長) 書き方の問題は、将来像と基本方針の所をもうちょっと検討してほしいという事か。

(委員) 印象としては、骨子案は長期総合計画の施策や今年度の予算の延長線上にある。そういう考え方であれば、それを元にもう一度まとめ直す、整理しなおすという事で、1から戻る訳ではないと思う。

(委員長) 骨子の流れは大幅に変えないにしても、目指すべき将来像は言葉ではなかなか伝わりにくいので、そこをちょっと検討してほしいという事はあるということか。

(委員) 違和感があるのは私だけかもしれないので、他の委員がじっくりくるのであれば会の総意として構わない。

(委員長) 検討するという事にしたい。

それから、7章の1. 産業振興のための活動支援と2. 産業振興のための環境整備というところの順番を入れ替えてほしいということか。

(委員) そうだ。

(委員長) 中身もそれに伴って少し変わってくるという事か。

(委員) 変わると思う。また、ここでは農業、工業、観光、商業という言葉が出てこないで、この計画を読んだ人が分かりやすいかどうか疑問である。市民に分かりやすいように作っていかなくてはならない。

(委員) 分かりやすいペーパーでいえば、各産業分野別に、左側にアンケート調査結果をまとめつつ、右側に活性化のための考え方と施策案を事業主体と事業環境別にまとめる案がある。

(委員長) 今回の委員会の議題は、7章がベースとなって、それを膨らませた産業振興プログラムをどのようにするかということになっている。その前提となる7章が物足りないとなると、8章も少し考え直さなければならないが、いかがか。

目指すべき将来像“しょく（職・食）がつなぐ産業と暮らしが豊かになるまちこだいら”という将来像には委員から疑義があるようだが、他の委員の意見はどうか。

- (委員) 職業の職と食べる食という所をつなぐということで、キャッチコピーに近いと思う。
7章と8章が具体的にイメージできていないので、全体的な流れに違和感があるのではないか。7章と8章がきちんと整理されると、全体的に整理されていくのではないかと感じる。
- (委員長) 他の委員はどうか。
- (委員) 難しい言葉が使われていなくて分かりやすいという印象がある。
- (委員) 同じく。
- (委員) キャッチコピーについては、きれいに見えるがぼやっとしているような気がする。
しょく(職・食)の下にある“産業と暮らしが豊かになるまちこだいら”という事がテーマということは分かる。重点施策やプログラムを考える所から、少しすっきりしたものができるとは思わないかと思う。
- (委員長) 委員から言われたように、7章、8章を議論していく中で、また考えるという事もあるかと思う。こちらでまとめた重点施策、実施プログラムについて、少し説明をして全体を議論していきたい。

産業振興基本計画重点施策案について

事務局から資料②を用いて、産業振興基本計画重点施策案について説明をした。

- (委員長) 今の説明について、質問や意見を。
- (委員) 農業経営基盤強化の所は農業振興計画の検討委員会の方で議論されている。そちらの委員会で6次産業化については産業振興基本計画の検討委員会で検討してほしいという意見があったが、そのあたりはどうなっているのか。
- (委員長) 農業振興計画の検討委員会では、6次産業化はまだ農家それぞれの中で確立していない上、加工や商業との結び付きをまだ考えられないので、可能であれば産業振興の方で考えてほしいということであった。
- (委員) 調査結果を見ると、各産業それぞれ売上がほしい、顧客開発がしたいという事ができた。これに対してはマーケティングやマネジメントが必要と考える。まだまだマーケティングに対する意識が低い。全くないといっても過言ではない。マーケティングやマネジメントの意識を啓発し、スキルを上げていく支援が非常に大事だと思う。これがないと6次産業化などできないと思う。
また、産業分野毎に分けてはいけないのか。多少クロスする部分はあると思うが、分野ごとに割り切ったほうが分かりやすい。あえてそう書かない理由はなにか。
- (事務局) 8章については、7章の重点施策を使っているので、ここであえて産業分野毎に分けることについては考慮していない。一方、従来型の施策、市が試算する産業ビジョンのようなものについては、産業分野毎に区分けされているものも世の中には多い事実もあるので、そういった構成について検討することも考えられる。今の段階ではまだ詳細部分が作り込めていない状況なので、伝わりやすさ等は検討の余地があると考ええる。
- (委員) あえて、従来通りの表現でと思っている。この委員会内ではなく市民の分かりやすさを考えると従来通りの方が良い。

(委員長) 骨子案の7章では、言葉は色々変わっているが、地域経済循環の促進という視点は書かれている。産業分野毎に言った方が分かりやすいのではという事か。

他に質問はあるか。

(委員) 空き家、空き店舗の利活用という事については具体的にどう考えているのか。また、ローカルな商圈の需用に対応した商店街の個性化について、どのような体制でできるのかについて聞きたい。

(事務局) 空き家についてはまだ検討が足りない現状である。創業支援とつながるのは、商店街の空き店舗のシャッターを開けるためにはどうしたら良いかということだ。改修や不動産業者とのマッチングをすることで、地域の中で開業するという事につながる可能性があるのではないかと考えている。

ローカルな商圈については、今までの商店街支援は総体的に一律補助するような支援策になりがちであったが、商店会のヒアリングをとおして、各商店会は必ずしも同じ施策を求めているわけではないことが分かった。例えばイベントを実施してもっと人を増やしたいところがあれば、学生などターゲットを絞って事業をしたいという意見もあった。商店街が失われつつあるところについては後継者支援など、それぞれの課題に応じて商店街の支援ができないかと考えている。

(委員) 空き店舗については、開店させていくという考え方とそのまま良いという考え方の2つがある。私は基本的に後者であると考え。体力がないにも関わらず、無理やり開店しても続かない。

ローカルな商圈の方は、マーケティングの知識不足、意識不足に結びつく。身近に住んでいる人に物を買ってもらうための店主の意識が低いことが原因にある。そういった意識を高める事が商店街の活性化の支援となる。

(委員長) 事業例はあくまでも例なので、追加削除を考えてもらいたい。他の委員から何かあるか。

(委員) 商店街の活性化と観光まちづくり振興プランの推進について、基礎調査の結果から観光で力を入れるべき取り組みについて、商店街の活性化という回答が多かった。理由を考えると、市内に多くある駅の周辺で空き店舗が多いために、イメージとして商店街に元気がないと感じるのではないか。できれば商店街の活性化の中に、観光まちづくりとの連携も入れてほしい。商店街を含めて地域を歩いてもらう事で、活性化につながると考える。また逆に観光まちづくり振興プランの中に商店街との連携を加えていくことも検討してみたらどうか。

また、大学・高校等との連携で、空き店舗を活用したギャラリーの整備という所があるが、商店街の活性化の空き店舗の利活用プログラムとして、市内大学生のアトリエ、ギャラリーの整備という支援も考えられる。そうすることで、商店街活性化と観光まちづくりと大学・高校連携がトータルで支援できるのではないか。

(委員長) 基礎調査によると、観光という視点が出てくるので、そのような点で支援を強化していけると良い。他に意見はあるか。

(委員) オープンガーデンの活用という事業例があるが、どのように活用されるのか。

(委員長) 小平ではオープンガーデンマップが作られているが、なかなか1軒訪れたあと、次

の1軒、もう1軒とはなっていない。オープンガーデンをもっと魅力あるように活用すると、先ほど委員が言われたようなまち歩きにつながるのではないか。また、オープンガーデンに加えて、観光農園や博物館などを組み合わせて観光資源とすることができるのではないか。

(委員) 就労支援で色々なスキルアップをすると書いてあるが、スキルアップしても就労する場所があるのか分からない。コワーキングスペースを活用していても、どうしたら働けるのか分からないような気がする。ハローワークでもマッチする仕事があるかということ、おそくないのではないか。人材マッチングというのは難しいと感じる。

たとえば、実現できるかは別として、高齢の店主のところ、赤ちゃんを見てもらいながら、主婦(夫)が働くということもあるのではないかと思った。

地域経済循環の促進については、果たしてこれで経済循環の促進ができるのか疑問である。商工会ではベリースタンプ事業を行っていて、スタンプを活用して地域の経済循環をしたいと考えている。例えば、店舗や住宅をリフォームした人にベリースタンプを多くあげる、そのスタンプを使って地域で買い物をしてもらおう、という事ができるのではないか。

大企業との連携では、サラリーマンが働いてそのまま帰ってしまうという事が問題だと思うが、やはり、地元商店に魅力がないのか。小平で飲んで食べて帰ることができるようにするには、どうにかして商店に魅力を持ってもらえるようにすること、小平に愛着を持ってもらえるようにすることを考えなくてはならない。

大学・高校等との連携の所で気になったことは、学生街形成プログラムということで、今までもこれだけ大学があるにも関わらず、なぜ小平を出てしまうのか、大学生は地方から出てきている人が多いと思うが、なぜ学生街ができにくいのか、根本になにかあるのではないかと思う。どのくらいの学生が小平に住んでいるのか、住めるような場所を作ったり、住みたい場所を作ったりすることで、そこで住んでいる人が何食かごはんを食べるといふこともあるのではないか。

(委員長) この事に対して意見はあるか。

(委員) 地域にもよるのではないか。花小金井南町では嘉悦大学があり、近くに商店街がある。商店街がさびれてから学生向けに店舗が開店したがうまくいかなかった。

(委員) 小平は明治初期には大学街として発展させようとしていた。学生街の形成はよい発想だと思う。

大学街が成功したまちが国立である。国立はドイツなどヨーロッパの街を真似て作っている。ヨーロッパの大学街は大学の教職員と学生のほとんどがその街の中に住んでいる。小平ではそういった教職員あるいは学生に住んでもらえるような環境が非常に大事だと思う。

(委員長) どれくらいの学生数かということとは分からないが、学生に聞くと、小平は家賃が低いと言われている。私が学生の頃もそうであった。一橋学園の駅の近くで学生街が形成されていた。そのような学生街というのはある意味で可能性は高いのではないか。

(委員) 鷹の台にも学校が多くある。

(委員長) 鷹の台は高校生が多い場所である。

他に何か。

(委員) 新産業について、既存のイノベーションではなく、時代に寄り添った新しい産業が必要なのではないか。小平における新産業は、基本的に良好な雇用環境を共有し、住んでいる方に新産業の価値や生活の価値を生み出さなければならず、小平の個性を出さなければならぬと考える。1番重要なのは居住環境との共生であるので、住宅地になじむ新しい産業を作り出していきたい。

そうすると3つ考えられる。1つ目は比較的場所を選ばない働き方が可能で、住宅地になじむSOHO型やアトリエ型のソフト産業、2つ目は日常の暮らしを支援し、地域課題を解決するコミュニティビジネス、3つ目は産業インキュベーションを誘発するまちづくり。こういった新しい3つの産業と従来型の既存産業とが、産業や暮らしの価値創出に向けて、より密に連動することで、小平の産業振興モデルが作りだされていく。そのモデルが小平市民の暮らしの中に溶け込むことによって、小平の暮らしのブランドができてくると考える。

ソフト産業は、福祉や保育の分野等のサービス産業やコンテンツ産業、クリエイティブ産業など。これらもまた設計研究開発型の産業だという事だ。こうしたソフト産業は、働き方改革が柔軟にできることや、その活動拠点は市内の空き家を活用できる、住宅地立地になじむアトリエ的な拠点である。こうした考え方を元に支援施策を考えると、事業主体に対しては、起業家の育成プログラム、あるいはマーケティング、マネジメント意識啓発が考えられる。事業環境に関しては、マッチング機能やインキュベーションを促す触媒機能を発揮するような「産業プラットフォーム」の整備、ソフト産業全般に関する「創業・企業ガイドプラン」というような支援が必要だと思う。

コミュニティビジネスでは、事業主体に対する支援策では、地域課題の調査分析や、消費者ニーズの把握や商品開発という事が必要である。事業環境に対する支援策はマッチング機能を整備する事が課題であると考えられる。

まちづくりについては、小平市では、生活系産業インキュベーション機能をもったまちづくりという事になる。これに対して考えられることの1つ目が都市農業公園の整備、2つ目がサードプレイスである。サードプレイスとは、地域居住者の第3の行きつけの居場所、多様な憩いと出会いと交流が機能する地域コミュニティの育みの空間である。こういったサードプレイス機能を持った施設を小平市に作り、地域社会との関係性を強めるための第3の居場所づくりをするという事である。特に危惧している事は、退職したシニアの第2、第3の居場所がない。そういったシニアのそれまでに蓄えた知識を活用する場としてもサードプレイスは必要な空間である。

3つ目小平市サイクルタウン構想。小平市には7つの駅があるが駅間を繋ぐ公共交通が少なく、自転車が市民の足となっている。一方で、道路を自転車ですることの不安があり、市内で自転車に関する交通事故は交通事故全体の45%を占めるということが指摘されている。もっと自転車に対して色々配慮しながら、自転車に乗って回遊するサイクル散歩をサポートしていくことがあって然るべきである。

(委員長) 副委員長から全体を通して意見を。

(副委員長) 最初の方で議論となった、7章の順番は入れ替えてもそれほど影響はないと思う。

ただ、環境整備の方を既存の産業区分で分けてしまうと、どうしてもはみ出してしまふところがでてくる。産業区分自体が統計の中でも度々変わっていて、比較できないような形になっており、色々新しい産業もできている。そうするとあえてそれを分類せずにまとめるという事は一つのやり方だと思う。ただ、既存の産業との関係が分からないということであれば、対応表を作るとか解説を加えることで、対応できるのではないかと思う。

学生街の話も、サードプレイス的な場所でたまり場的なものを用意する事で、他の世代との交流の場を設けることになるのではないかと、いくつかのアイデアの中で考えるところがあった。

(委員長) オブザーバーから意見を。

(オブザーバー) 将来像は今の議論を聞いている範囲だと、違和感があると思う。職と食という事があまり出てこないで、議論した方が良いのではないか。

基本方針は上がお金の話で、下が豊かにするという話だが、逆にした方が小平の特徴らしいのではないか。

5章のところで、市内産業の高収益化の実現とあるが、これは小平では無理なのではないかと思う。もう少し書きようがあるのではないか。また、大企業との連携については、大企業だけでなく、地元企業の従業員にも地域で買い物してもらい、地域と一緒にやるという意識を持ってもらうようなことをしてもいいのではないか。他に、住む人、働く人という事が重点施策では弱いと思うのでもう少し書く必要があると感じた。

7章については、基礎自治体がこんなにやりきれぬのかということがあるので、優先順位を付けて、民間に出していかなければならないと思う。委員から提案のあったコミュニティビジネスなど、重点施策に入れ込むには内容が決まっていないので難しいという意識があるのならば、アイデアとしてコラム的に入れるのも良いと思った。

9章に産業振興の担い手とあるが、全部行政がやるのではなく、市民や商工会など色々な人の力を使いながらの方がいいと思った。

(委員長) 最後に委員から意見はあるか。

(委員) 重要な施策、大事なこととして、1つ目に税収に結び付けるという事。自主財源を確保する、健全な財政を担保として生き残る、という目標は掲げてほしい。

2つ目にブランディングについては、他の委員から指摘のあった産業イノベーションによるまちづくりと同じような意味を持つ。“農業・農地と共存するまち”を産業振興の重要な基盤とする、“小平市の産業振興”をモデル化してブランディングすることはできないか。

3つ目は企業誘致や農業商業を含めた産業連関を推進するために、その関係者と顧客が参加する“交流の場”を行政が呼びかけて立ちあげることができないか、ということだ。顧客という言葉は色々な意味があるが、この言葉を入れてほしい。

4つ目はICTの活用である。小平市のICTリテラシーは低いと思っている。行政、市民、農家、企業のICTリテラシーを高めるモデル地区を設置することはでき

ないか。ICT企業の創業や誘致に結び付ける。ICTリテラシーが高ければ、企業は来やすいと考える。

5つ目は大企業や近隣市、区部との連携である。市長が先頭に立って、市の職員が企業や区部に出向し、そこでのやり方を学んではどうか。こういったことが、テレワークのためのサテライトオフィス誘致等につながる。

6つ目は人材を育成することである。市内外の専門性のある大学と連携するほか、市内大学が市の産業振興に参加することによって、ビジネス化のノウハウも身につけてもらい連携してほしい。

さらに、行政が担当して実施する事をあらかじめ明確にし、民間の活動を前提とした施策のロードマップを策定すること、KPIを設定して定期的に進捗を評価、見直しをする事が必要である。そして、ICTを含めて、この計画を市長直轄プロジェクトとし、ICT政策を統括するCIOやプロジェクトを定期的の評価するプロジェクト監査委員会を設置することを考えていただきたい。

(委員長) 本日の委員会では、修正点が多く指摘された。次回は意見を参考にしながら、計画の素案を書き込んだものを提示したい。次回の第7回の検討委員会は9月25日を予定している。

(3) その他

今後の日程等について

事務局から、資料③を用いて、今後の日程等について説明した。

(委員長) それでは、第6回検討委員会を終了とする。

以 上